一茶と女たち

川島つゆ

一茶は、明治の末期自然主義思潮の波に乗って、その人及びその作品に新しい目が向けられるようになったことは衆知のことで、一時は芭蕉・蕪村に次いで一茶時代の称呼さえ行われるに至った。（日本俳書大系十七冊のうち芭蕉時代・蕪村時代・一茶時代各一部を含む。大正十五年――昭和三年、春秋社刊）そして今日に至るもなお毎年何冊かの研究・評伝書を加えつつある。

そのうち専門的立場から一茶を心理学的に、あるいは社会学的に解剖批判されているのが大槻憲二氏の『一茶の精神分析』（宮田戊子氏と共著昭和十三年）である。これは一茶の性格の特徴として幼児性劣等感を重視され、彼の日記やその他の作品を例証されている示唆に富んだ研究であるが、ただ相手が俳人であり、俳句という季節文学であるという点において一概には賛意を表しがたいものもある。一茶は十年連れ添った妻きく女に先立たれ、その翌年六十二歳で、小藩飯山の家中の女、雪女を後妻としたが、これははじめから奇妙な入れちがい夫婦であって、はたして二ケ月余りで離縁となった。

糸瓜蔓切ってしまへばもとの水

一茶と女たち

句帖にはないが、これがこの時の吟と伝えられている（一茶没後の天保四年稿宋鵜撰「一茶発句鈔追加」に「離別」と題して「糸瓜蔓切ってしまへば他人哉」とある）。大槻氏はこれを卒直に生理的水と解していられる。既成風雅観に反撥し、露悪趣味的な一面もあった一茶のことゆえ、あえて抗弁するまでもないが、当時の句帖を見ると、文政七年八月の部に、

三晴　犬蟹節一本引。雪女離縁。

とあり、七日に荷物受取人が来て一泊、八日には「荷物皆引取」とある。すなわち眼前に糸瓜のなりさがっている時であって、糸瓜の水を取るに適しているという十五夜も間近にひかえていたことも一考すべきであろう。正岡子規の忌日はもちろん新暦の九月十九日であるが、没する前日

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな
をとゝひの糸瓜の水も取らざりき
痰一斗糸瓜の水も間に合はず

の三句を病床における絶筆としたので、子規忌は一名糸瓜忌とも呼ばれている。もし子規が仲秋に死んでいなかったら、これらの句も

なく糸瓜忌と呼ばれるものもなかったはずである。

それはそれとして近年俳諧研究者間に問題を投げているのは、大場俊助氏の労著『一茶の愛と死』（三十九年十二月、芦書房）及び『一茶のウィタ・セクスアリス』（四十年七月、芦書房）である。一茶は寛政四年から同十年まで、三十歳から三十六歳にわたる壮年期を過ごした関西旅行中に「思恋」と題して「思ふ人の側へ割込む巨燵哉」などと露骨な句をのこしているが、長期の旅行後再び江戸に帰って風来坊となっていたらしい彼は、三十九歳の時帰省して宿縁深くも老父の重病の床に侍することとなった。「父の終焉日記」がそれである。私は、父の遺言による遺産問題の解決をそのままにして三度江戸に出た一茶のその後の住居が、現存している享和三年（一茶四十一歳）句帖の扉の宿所附に、

江戸本所五ツ目大島　愛宕山別当　一茶園雲外

とあり、次の『文化句帖』の扉にも同じようにあるのを便りに踏査（「江戸時代の一茶」（早稲田文学一茶百年記念号大正十五年七月、並びに小著『一茶の種々相』昭和三年、同『一茶』昭和二十一年にも採録してある）の歩を進めたのであったが、旧愛宕神社は遺憾ながら大震火災の飛火のために焼失して、近所に新社地が設けられてあった。旧愛宕神社は竪川と小名木川とをつなぐ釜屋堀の東岸、堀から半丁ほど引込んだところ（大島町二ノ六六番地）にあって、百五十坪の敷地には、震災後二三年を経たその時もなお避難者のトタン小屋が雑然と建ち並んでいた。私はこの愛宕社が大島移転前に属していたという中ノ郷カラタチ寺をも訪うたが、愛宕社には平常神官などは居らず、従って別当という職名もなかったはずで、一茶が別当と称し、また『新増行程大全』という旅行案内の表紙裏にも「江戸本所五ツ目アタゴ住寺一茶」などと書入れているのは、いずれも潜称と見られる。但し前記『享和句帖』の扉に「一茶園雲外」とあるのは、この一時期用いていた号で、先年金沢の殿田氏によって発見された享和三年作と確認される成美・雲外両吟歌仙を『書物展望』（昭和十九年十月）に紹介しておいた。

『享和句帖』は、享和三年四月十一日から同年十二月十一日の日付をもって終っているが、智識的にはり切っていた年であって、四月に「詩経講譯出席」の書入れがあり、同年中の作には詩経の章句によったものが多い（中には古人の作をはめこんだものもあるが）。これらについて見ると、同年末まで幾度か講義に出席して、詩経の過半を聴講したものらしく、講義に出席のためか、この期間における行脚の日数は毎回極めて短い。

この特殊な作句の試みは八月から連続しているが、次第にあぶらが乗って来て、十月になると初めの方へ逆に章を追っていることに気がつかされる。そして、巻初まで逆行して、十一月に入ってから再び元の順序に復している。これは明かに、難解な詩経の全章の俳譯を企てたもので、その意欲のたくましさに圧倒させられる。この外に易も研究していたらしく、易の言葉を前書とした句も見出される。易はこの後他人の縁談を判断してやるまでにすすんでいる。又『清俗紀聞』を読んで支那語の書入れもやっているが、これは他日長崎漫遊でも試みようとする心用意のため、というよりも単なる好学的好奇心であったらしい。その間には芝居・あやつり見物、物

詣で等の行楽も絶やしていない。もっとも、行脚で口を糊する渡世俳人のわびしさは、

小金領篠篭田村より呼塚村に出る、流山より我ビコ迄三里

霜どけやとらまる枝は茨也

けふ一かたけたらへざりしさへかなしく思ひ侍るに、古へ翁の漂泊かゝる事日々なるべし

三度くふ旅もつたいな時雨雲

ざぶりぐ〳〵雨ふる枯野哉

など、さすがに哀れ深いものもあるが、とにかく『享和句帖』の中には、なお若々しい野望の覆い切れぬものがあるので、「愛宕別当」とか「アタゴ住寺」とか記すことも、一面超俗を衒う自慰的満足のためだったかと思われもする。雲外の号も、これまで愛宕在住時代以外には見出されぬので、この文字の好みが当時の一茶の心境を反映しているようにも考えられるのである。当時一茶は神社に付属する道具小屋の片隅に起居していたらしいが、男の厄年と言われる四十二歳になった文化元年正月には、心中期するところのある如く『文化句帖』の冒頭に「今歳称革命年、倩四十二年他国ニ送ル星霜」と書きつけている。そして前年中あれほどに執した漢詩趣味をさらりと捨てて、彼の日記体句帖の特色を成す日々の晴雨の外に、市井の雑事の記入が多くなっている。この年を界として、一茶の眼は新たにきびしい現実に向って見開かれ、彼の足はじっくりと地について来たかの観がある。しかるに大場氏の二著においては、『享和句帖』から『文化句帖』にかけての

我星は上総の空をうろつくか

木に鳴くはやもめ鳥や天の川

近よれば祟る榎ぞゆふ涼み

などを例証されて、一茶がひそかに思慕を寄せていたという上総の花嬌女に対する哀恋の苦悩を追究されている。彼女については、一茶の江戸俳壇引退記念集ともいうべき『三韓人』（文化十一年十一月板）に

文化七年四月三日没　女花嬌

用のない髪とおもへば暑さかな　同

春風や女ぢからの鍬にまで　同

の二句と、『随斎筆紀』にも右の二句の外に、

名月や乳房くはへて指して　花嬌

雪の家同じ二つはなかりけり　同

昼顔や田中の塚の小豆飯　同

梅がかの甚しさも一夜哉　同

と一茶が書き入れている。一茶門の撰集で年代の最も下っている『たねおろし』（文政九年板）にも「名月や」の一句を入れてある。両人の交渉は何時を始めとするか明かでないが、一茶は、少なくとも享和三年以後は毎年上総方面を行脚しているし、彼の文通控帳『急通記』によると、前後七年にわたる西国行脚を終えた寛政十年頃には、すでにこの方面との書通が開けており、文化一・二年には花嬌との書状の往復もある。花嬌と一座した連句の残っているのは、文化六年三月すなわち彼女の死の前年春、上総富津の対潮庵（花嬌の庵号、対湖庵ヵ）において、同郷の俳人文東、彼女の息子の子盛、菩提所木更津大乗寺の住僧徳阿および一茶の五人で行われ

た歌仙である。

かい曲り寝て見る藤の咲にけり　花嬌
　薪割る音に春の暮れ行く　文東
細長い山のはづれに雉子啼て　一茶
　鍋蓋ほどにいづる夕月　嬌
烏帽子着て風に吹るゝ萩の花　徳阿
　貢の酒の桶つくるらん　東
牛の子を秤にかけて淋しがり　嬌
　ひとり経よむまでになりしや　阿
山科は牡丹の花の盛にて　東
　糸を染め〳〵待つ人もなし　茶
暁の小川に夢を流す也　阿
　幣ふる役は仏五右衛門　嬌
をり〳〵の雨降る度に餅の事　東
　おとゝし見たるみよし野の月　阿
痩骨のふし〴〵しみる風吹て　子盛
　彼岸の鐘のどびやうしに鳴る　茶
豆腐殻花のさかりにけぶりけり　嬌
　大薙刀にかゝる春雨　盛
　鶯の鳴行く方へ船引て　嬌
　爺の建たる蔵に注連張る　同

以下略

一茶の好みの加わっていることは否みがたいが、その卑俗調になずみながら卑俗に堕さず、牛の子の郷土的情調、暁の夢に対する説話的構想、豆腐がらの野趣、大薙刀に対する鶯の古典的応酬など、これだけでも、俳壇の主流から遠い一女流として侮りがたい手腕が認められる。一茶は花嬌三回忌法要の後、富津に滞在して遺稿の整理をしたらしく、『七番日記』文化九年五月三日の条に、

三晴　花喬家集並追善集　五月（四月の誤記）十二日書始、今日終、大乗寺ニ入

とある。この記事あるために花嬌家集なるものがしばしば問題となるのであったが、まだ発見された報に接しない。しかるに昭和十一年、花嬌の玄孫で富津に現住される織本泰氏によって『花嬌遺稿』なる小冊子が公にされたことはよろこばしいことであったが、同書の小伝には、

花嬌名は園、上総西川村（今君津郡青堀町に属す）里正小柴庄左衛門の女にして、富津村里正織本嘉右衛門（後永祥と称し砂明と号す）に嫁す。対潮庵と号し、才名あり、俳諧を好み、蓼太・一茶等を友とし善し。文化七年（一八一〇）庚午四月三日没せり。大乗寺に葬る。

とあるばかりで、花嬌の享年および他の人々の享没年も明かにされていない。なお砂明は同国金谷にいた僧で、一茶の日記には、この後もしばしば砂明上人云々の書入れがある。子盛が彼女の息子で、その妻曽和もともに俳諧を嗜んだことは系譜によって知らされた。同書に採録されてある花嬌の作は六十余句である。

鶯や鳴く時動く影法師
　舞ふ雲雀入相の帆にかゝりけり
白梅や軒端にかけし干あらめ

藍くさき此の町早し更衣
更衣母の衣紋を直しけり
かい巻をすべらかしけり時鳥
夕凪やあっけない日の菊にさす
白菊につまあれの手の見られけり
籾するや時雨かぶさる軒の雲

など、いかにも女らしい繊細な観察や感情を現わしたものが多いが、中には、

紅梅やあこめ使の北の壺
紅梅や丈なす髪の夕面
短夜の残夢帆影に乱れけり
朝月や明けて近江の水の上
水鳥の水ふるひけり河原草

のように、天明風の古典味や、調子の張ったもの、あるいは、

杉の香の深き夜明けや岩清水
白蓮の小雨静かに明けにけり
冬篭おなじからざる月夜哉

など、静かな心境のうかがえるものもある。また、

梅見船入江に木履持たせけり
白梅や年の名残の茶を立てん

などには、良家の女の一面が写されている。この外に「すみれの袖」と題して、花嬌が仲のよい貞印尼その他と連れ立ち、成田詣でを兼ねて江戸をおとずれた時の八日間の紀行が載っているが、古典的教養に裏づけられた簡潔温雅な筆致である。この紀行の年次は不明であるが、「老足のむつかしく」とあるので、晩年のものと思われる。なお、同書所収雨月という俳人から花嬌にあてた書簡に「御孫様のこりなう麻疹御すみ被成御めでたさかぎりなう」とあるので、幾人か孫を見たことも知られる。同じく江戸の蓼太・春蟻からの書簡によると、これらの人々にも折々点を乞うていたようである。要するに、花嬌は教養も技倆も相当なものであったが、もともと良家の女で、業俳ではなく、一家の者と共に斯道に遊んだのであろう。

女に縁の薄い一茶は、長期の西国旅行中にも、寛政五年（三十三歳）京都の芭蕉堂で催おされた闌更らとの俳諧に、闌更の妻得終（後に南無庵の文台を立てて女宗匠となった）と同席したくらいのものである。江戸に帰ってからも、夏目成美を中心とする俳席で梅夫・浜藻ら（夫婦と伝えられているが、父娘との説もある。二人は文化三年秋から九州・四国・中国の旅に出、あるいは別れ、あるいは落合って諸家と俳交し、梅夫は『草神楽』浜藻は『八重山吹』という姉妹篇を成す旅の記念集を出している）と一座しているが、一茶は浜藻の才女振りが煙たかったらしく、

浜藻　　鶴老
鶯や田舎巡りのおちゃっぴい
乙鳥よ紅粉（べに）がたらずば梅の花　　一茶

とある。遠慮のない常陸守谷の西林寺住職鶴老と、浜藻のわる口でも語り合ったことであろう。それと違って花嬌は、一茶の生活をほそぼそと支えている房総行脚の極南の地に咲出た花で、不自由のない身の上のことであるから、一茶のおとずれるたびに優しい言葉を

かけ、時には身のまわりのことも気をつけてやることもあったろう。

うつくしき団持けり未亡人

『享和句帖』七月二日と同十八日に重出している。一茶ばかりではなく、辺地にあって花嬌ほどの女流を持ったことは、郷土の誇りであったにちがいない。四十を越して孤独な一茶が、仮想裡に年長の花嬌を対象として天の川を仰ぎ、星合の句を作ったとしても、極めて自然である。しかし、彼女の三回忌に当る文化九年四月の『七番日記』に

四日　花喬仏

目覚しのぼたん芍薬でありしよな

何をいふはりあひもなし芥子の花

とある。『一茶の愛と死』においては、これをそのまま美人の形容のごとく解しておられるがいかがなものであろうか。この句はよく働いているが、もともと「立てば芍薬座れば牡丹」という俚諺・俗謡に夏季を持たせたものである。なお私は、恋愛感情にも時代的影響や束縛はまぬがれ得ないものだと思っている。これは一例に過ぎぬが、星布尼は武州八王寺元横山の名家榎本家の女で、婿を迎えて一子をあげたが、三十九歳で寡婦となった。鳥酔門であったが、師の没後は専ら同門の俊才白雄の指導をうけていた。剃髪を望んでいたが、六十歳になるまではという亡父の遺誡を守って、その六十才になった寛政三年八月望み通りの姿となったが、その翌月白雄が急逝した。白雄は五十四歳あるいは五十七歳とも伝えられる。白雄に対する。彼女の多くの悼句があるが、

白雄翁のなつかしき此夜

長き夜や思ひあまりの泣寝入

百ケ日

九十九夜我も泣きしよ磯千鳥

など、あまりに情熱的な作句なので、星布・白雄の関係をただならぬもののように考えたがる者もあるが、同じ八王寺の出身で厳父は槍組千人隊士の一人であった天野雨山氏（昭和二十四年没）など、あり得べからざることとして激しく憤っておられた。星布は女性には珍しい雄頴な俳調であるが、また、手蹟・文事・手芸一般に通達していて、郷党の子女間に師と仰がれていた。天野氏の父方の曽祖母も、星布に和歌や裁縫を習ったということである。

一茶は享和元年三十九歳で父親に死別してから、遺産の件はそのままにして、また江戸に出て来た。もっとも、それ以来十三年間他郷にあっても、役金を上納して村民権を確保しておいたほど周到な彼のことであるから、権利を放棄する気持など全然なかったことは自明であるが、彼にはなお捨て切れぬ若さの夢があった。何と言っても万人のあこがれてくる江戸である。成美のような勝れた先輩もいた。親しい友人も多かった。定期行脚の地には花嬌のような女流俳人もいた。小遣銭のあるかぎりは物見遊山も欠かさぬ彼でもあった。とは言え、文化二年ころには特に窮乏していたらしく、日記には「随斎朝飯」の記入が多く、また「誓願寺朝飯」「大口屋隠宅夕飯」などともある。当時相生町五丁目に住んでいた一茶が、随斎成美の隠宅のある多田の森まで小一里もある道を、空腹をかかえてゆく痩せがれた姿が思いやられる。

米高直ナルガ故ニ　薪高直ナルガ故ニ玉をかしぎ　桂をたく

という書入れのあるのもこの年である。成美・乙二とともに寛政三大家と呼ばれ、あるいはまた俗俳の代表のようにも言われている道彦は、その年七月六日「道彦会池ノ端　大山氏ニアリ」とあって、一茶も出席している。一茶は後年、成功者道彦が道中駕籠を飛ばして、二百日ばかりの遠路の国々を土踏まずに廻ったということを友人に報じているが、その道彦とて仙台の出身である。江戸じまぬ一茶はしみじみと世才のなさを嘆じたことであろう。そうしているうちにも年齢の波は遠慮なく足許に押寄せていた。

菅笠日記。明和九、三月五日本居四十三歳ノ時也

当時一茶は四十五歳になっていた。どうかしなければならない。どうかしなければならない。という心中のあせりが聞えてくるようである。そうした彼が、今まで比較的なげやりにしてあった故郷――故郷の家産にはげしい意欲を燃やしはじめたのは、極めて自然であろう。四十五歳になった文化四年の七・八月ころ、一茶は亡父の七回忌法要をかねて帰郷した。この頃の委しい日記を欠くが、恐らく、この機会に遺産分配の件について談判するつもりであったのだろうが、形勢は甚だ不利であったらしく、一旦江戸に帰って、同年十月のはじめに「国に行かんとして心すすまず」と記しながら再び旅笠をとった。

雪の日や古郷人のぶあしらひ

心からしなのゝ雪に降られけり

かじき佩て出ても用はなかりけり

十五歳から故郷をはなれている一茶には、かじき（かんじきのこと。雪中に足を踏込まぬためにわら靴などの下にはく）をはいて出ても、親しく訪い寄る友もなかったのであろう。

翌文化五年は、七月九日に取越して行われる祖母三十三回忌を中心に、その前後は草津その他の旅にあったが、十一月二十四日に至り、村役人立会の上で亡父遺産の田畑山林の一部と家屋敷半分を譲り受けることに決着し、取極めの一札を村役場に差出すまでになった。そこで、久振りに江戸に帰って見ると、相生町五丁目の借家は他人に借りられてしまっていたので、仕方なく成美の家にころがりこんで正月を迎えるていたらくであった。

文化六年は五月八日に柏原に帰着している。この年八月十五日近村長沼の俳人村松春甫と共に姥捨山の月を賞した。長沼は帰郷後の一茶のために有力な一茶閥であったが、すでにこの頃から将来の生活設計の立てられていたことが考えられる。春甫の『菫集』の出板されたのはこの翌年である。

文化七年四月三日上総の花嬌が死んだが、一茶は下総行脚中で、その死を知ることが遅かった。百ケ日には富津大乗寺に詣でて、

草花やいふもかたるも秋の風

葬の花もきのふのきのふ哉

とある。これより以前五月十日に江戸を出、十九日柏原に入っている。途中の疲労が甚しかったが、我が家に憩わず、更に北へ一里越して野尻の知人宅に泊り、翌日柏原に入って墓参を済ませ、村長誰かれにも逢ってから我が家に入った。「きのふ心の占のごとく素湯一つとも云ざればそこ〳〵にして出る」

古郷やよるもさはるも茨の花

と呪っているが、一方的には聞かれぬのであって、遺産分配の件は異母弟らとしても生死のかかった問題であったろうし、そこへ長袖の兄貴が時々やって来て難題を吹きかける、というようにしか理解できなかったろう。この時は他家に一泊して、翌日また六十里の道を引返しているが、一茶の執念は烈しくなるばかりであった。

いざいなん江戸は涼みもむづかしき

ついに五十歳の声を聞いた文化九年には、六月十二日江戸を立って十八日に柏原着、本陣の中村観国方に泊り、八月十二日柏原を発して同十八日江戸に帰った。更に十一月十七日江戸を発して、二十四日柏原帰着、

是がまあつひの栖か雪五尺

もはやテコでも動くことではなかった。一茶は明専寺門前に借家して頑張ったのである。明くる文化十年正月十九日亡父十三回忌の法要がいとなまれた。その席でもなお例の問題は難行していたが、当時柏原は天領であったため、一茶は江戸の紀問所に上訴すると息まいたために、明専寺の住職が仲裁に入って、ここに十三年間にわたる紛争は解決した。約束の田畑家屋の外に、これまでの滞代金として金拾壱両二分現金で引立てられたことは、農民の仙六（異母弟）にとって随分痛手であったろう。一茶の要求は金三十両であった。

涼風も今は身になる我家哉

大の字に寝て涼しさよ淋しさよ

仙六と棟を割って住むようになってから、翌年一茶は新婦きく女を迎えた。『七番日記』文化十一年の重要記事抄出に「四月十一日赤川里娶ル常田氏女ヲ廿二十八ト云。五十二ニシテ始テ妻帯ス」とある。きく女は取立てていうほどのこともないが、一般農家の婦人と等しく、健康でよく働く女性らしかった。

我菊やなりにもふりにもかまはずに

菊女祝

涼風や何喰はせても二人前

前者は文化十二年九月、後者は文政五年七月の句帳に見出せる。『おらが春』の長女さと女の記の中では、きく女は愛情具足の女人相を呈しているが、反対に、次男石太郎を窒死せしめた時には「片葉の芦の片意地強く」と酷評され、放浪時代から持続けて来た「女子と小人はやしなひがたし」の嘆を深からしめている。しかし、これは一茶が悲嘆にまかせた文字であるから、そのままに受入れがたいのはもちろんである。それよりも、長い間血で血を洗う確執を続けて来た継母や異母弟らと隣合せに住んでも平気で暮らせたのは、一茶の現金さもさることながら、日記によると、今日は二人して隣へ夕蕎麦に招かれ、翌日は隣へいも汁を贈るというように、いかにも仲よさそうに見えるのは、きく女がその間に立って、特に風波を起させるような女でなかったことの証左ともなろう。要するにきく女は平凡な型に属する女で、一茶のように異常な経歴を持ったすね者の晩年の伴侶としては、その人を得たというべく、二人の家庭生活は概して幸福であったと思われる。

ただここに、きく女は本陣中村家に奉公していた女で、主人観国との間に純ならぬものがあったという所伝のあることで、もっとも

これは長子混蔵説、すなわち混血の疑いをもって一茶が命名したという説と関連しているのであって、現在にあっては混蔵説は否定され、文化十三年四月長男千太郎出生が確認されているのであるから、自然根拠の弱いものと考えられるが、本陣に奉公していたということは、一茶と本陣との関係から見てもうなずかれることであり、きく女も折々手伝いにでも行ったらしく、「妻本陣夕食」というような記事が散見する。それに、江戸帰りの宗匠に配するには、一通り折りかがみも心得た者が選まれたであろうことも、極めて至当と考えられる。しかし、立ち易いうわさの真偽はともかくも、その当時において、特に教養とてもない農村出の婦人が、二十八歳まで純潔を保ち得たかどうかは断言し難いのであって、従って、異母弟と棟を仕切って家半分の主人となり、一先ず生活の根拠はうち立てられたものの、決して富有とまでは言えなかった一茶は、五十二歳の新婚とは言いえ、世間知らずの箱入り娘を迎えたわけではなかったのである。

しかし、一茶は新婚三ケ月目の同年七月から十二月まで（江戸俳壇引退記念集ともいうべき『三韓人』刊行が主たる用件）。翌十二年八月から十二月まで、十三年九月から十四年七月まで、郷里をあとに江戸及び常総地方に長逗留しているのであって、これを見ても、後顧のうれいなく他行していたと考えられる。一茶の留守中、きく女は多く赤川の実家もしくは一茶の母の実家二倉に行っていたようである。そして、この間に、結婚後二年目の文化十三年四月十四日に、長男千太郎が生れた。四月はじめに、一茶は出産近いきく女を連れて赤川に行った。

一茶と女たち

五　晴　妻赤川行一茶同道

六　風雨　逗留

柏原から野尻湖に通じるうねうねとした坦道を、臨月の腹をかかえている若い妻をいたわりながら、白髪の夫が小さな包でも背負って付き添ってゆくかっこうは、人世の悲喜劇とでも言おうか。この時に生れた長男は生後一ケ月足らずで死んだ。胎内に十ケ月やどした母親とは異って、悔恨も割合に淡かったらしく、『七番日記』を探しても、

是はさて寝耳に水の時鳥

このおどけた調子に、わずかにそれと思えば思われる。それに、いわゆる一茶調が出来上って、一句作者となり切った江戸住後期以来、彼の実生活と句境との間に開きのできて来たことも注目に値する。しかし、子供の出生と死没というこの現実の大きな出来事は、頽齢の一茶の体内に新たな意欲を燃え立たしめたかのようである。嬰児在世中の五月二日には「本陣中食　黄精摘」その没後半月を経た五月二十六日には「為レ来三姪羊藿一至二紫山一」とある。姪羊藿は花のかたちによって碇草とも呼ばれる。黄精は一名鳴子百合、いずれも根を薬用とする強精剤である。これらの薬草に関心を持ったのは、この時にはじまったことではなく、その前年は江戸の知人にまで黄精を注文してやった形跡がある。

将来を期待していた嬰児を失って後の一茶の家庭には、折々低気圧が襲来したらしく、

二　晴　大風吹

酉刻菊女近辺ニ不居、古間川迄捜ス所不見、然所家尻ニ

洗濯シテ居タリシトカヤ。

三　時々雨又風

春サシタル木瓜青〳〵ト葉ヲ出シタル所、キク女一旦ノ怒ニ引ヌク、而後過ヲクヒテ又サシタリ、此木再根ツカバ不思議タルベシト云々。

これは子供の死んだ年の八月二日・三日の記事である。古間川は柏原の南端古間に通ずる坂を下りたところに、滔々と流れている川であるが、其処まで見に行ったということに、ただならぬ気配が感ぜられる。感情一途でありながら気の小さい一茶は、何か夫婦いさかいのあとで、狭い女心を思って、目の色を変えて川まで探しに行ったのであろう。又、翌日の木瓜のさし木云々には、言いときがたい女の憤りや悲しみが篤められているようである。たっぷり親子だけ違う夫婦の年齢差や、それまでの生活環境に大いなる隔りのあった夫婦の相剋や、きく女の過去にからまる流説なども、複雑な内容として考え合わされる。

しかも、この八月中の閨房の記事は特に異常と思われるものである。嬰児が早世したためか、きく女のからだの回復は早く、八月はじめには既に生理日の記入がある。そして、ほとんど連日、しかも、その上に冠せられた数字をいかに解すべきであろうか。

一茶は江戸流寓時代から本草の序などを書きつけている。又聞込むにまかせて民間薬、民間療法の類を覚え書している。それらの知識を世間にも伝えたいと思ったものか、この年三月「中風治方」「癲治方」その他を刷物にしたものを頒布したらしく、その一枚が残っている。一茶の日記は一応覚え書しておいたものを、まとめて書込む習慣を持っていたらしいが『七番日記』九年間の七千五百にも余る句数を、五号活字大（上欄の記事は六号活字大）でびっしりと書きこんでいるのを見ると、必ずしも第三者に見せまいとする備忘ではあり得なかったようである。すると、あるいは個人差のあるという自己の強精を誇るか、又は当時の常識書である貝原益軒の『養生訓』に見える房中の術、いわゆる補益説（不泄）でも参考しつつあったのではないかと考えられもするが、知己と逢った際「又虚言ス」（文化九、十一、五）と日記していることなどを思うと、秘中の秘事をのぞき見しようとする人間の心理を馬鹿にしているように思われなくもない。ただ見逃しがたいのは、ゆがめられた一茶の過去への追想である。主我的な、勘定高い、算用好きな一茶が、満たされざる血気の時代の取返しとして、この数字の記録が現れていないと誰が言い切れよう。特に一茶は結婚後も留守勝ちなのである。現にこの翌月からまた長期の旅に出るからだでもあった。この後も二回連続的に記録されている箇所があるが、その二回とも細君の妊娠の確認される時期であったことに徴しても、単に子供欲しさというような奇麗事では解決出来ぬ息苦しい問題である。

このように、時に低気圧の襲来することがあったとは言え、家珍しく妻珍しい一茶の結婚生活は、大体として順調であった。そして、その翌月すなわち文化十三年九月半ばに柏原を立って、結婚後第三回目の江戸入りをした。その旅中の下総行脚中に、一茶の畏友であり、庇護者でもあった夏目成美が死んだ。

随斎旧迹

霜がれや米くれろとて鳴雀

霜がれや何を手向にセイビ仏

など、友人つきあいとは言え、富有な大家の旦那と、その台所で一飯の恵みにあずかって来た貧乏俳人との差は、本質的には融和出来なかったのであろう。まことに誠意のない悼句である。

そのころから一茶は全身にひぜんを発してすこぶる悩まされていたので、療養のために年末から下総守谷の西林寺に入って、十四年の正月を迎え、前後一ヶ月余滞在した。西林寺の住職は例の俳友鶴老である。この年三月、一時江戸に戻っていた一茶から故郷の妻に宛てた手紙は、一にひぜん状とも呼ばれている。

其後御安清被レ成候哉奉レ賀。されば私、前に申越候通り、去十一月よりひぜん発し、外へ行も遠慮いたし居候処、十二月十三日より足のうらも腫候へば、山寺に篭り療治仕候。早直しの付薬も人々進め候へども、追込ん事をおそれて、さやうなる薬さっぱり用ずして出来次第にいたし置候処、今以てぢく〳〵膿水したゝり申候。毒立等も一向不レ仕候。食物等常の通り不二相替一、しかし十一月より今三月迄、丸四月どちらへも行ず居り候へば、用むき一向に片付かずこまり入候。当月中ごろよりそろ〳〵上総の方に可レ参候へども、正味四月一月にて、五月廿一日迄には、足を引ずりても墓参り仕度、さやうに候へば、四月一月卅日の中には、用むき半分もらち明不レ申候と奉レ存候。何を申もひぜんといふ人のいやがるものにできられたる此度の仕合、是も前世の業因ならんとあきらめ申候。

長〳〵の留守、さぞ〳〵退屈ならんと察し候へども、病には勝れず候。其方には、うす着になりて風でも引かぬやうに心がけ、何はたらかずともよろしく候間、十四日十七日の茶日ばかりは忘れぬやうに頼入候。旧冬より此方は雪ちら〳〵したる事も有レ之候へども、一寸ともつもる事なく、埃ばっぱっとかん〳〵道なれば、自由自在に馳歩んと思ひけるに、ひぜんに引とどめられたる一茶が心、御推察可レ被レ下候。下略。

こまごまとした手紙であるが、後半は羽箒で撫でられるようである。五月二十一日は父の祥月命日、十四日は祖母、十七日は母の命日である。しかしこの予定より一ヶ月も遅れて、四月半ばに上総に出かけ、五月十日過ぎまで逗留した。この時も亡き花嬌の家、織本家を足溜りとしている。この手紙は一茶の誇張癖以上のものを遺憾なく暴露している。十一月はじめからひぜんに悩まされていたことは、他の書簡によっても明らかであるが、寺に篭ったのは丸々一ヶ月で、「十一月より今三月まで丸四月どちらへも行ず」とあるのは大うそである。十一月中の前半は江戸にあって俳友を訪い、後半は下総に遊杖、月末江戸に戻って、更に十二月はじめに下総布川にゆき、この時は同地の友人月船のもとに数日滞留したらしいが、また江戸に戻って所用を達し、両国の芝居を見物などしてから、改めて十二月二十日に発足、馬橋を経て守谷の西林寺に入っている。一月の末に寺を出てからも、ちょっと江戸に帰って湯島の芝居を見たり、俳友蕉雨の妻の病気を見舞ったりしている。そして、二月中の多くは布川にあって、連夜志道軒（宝暦ころの人とは違う）の軍談を聞き、二十八日の晩は流山で、念仏踊を見物し、三月一日には隅田川の花を見て、久松町の知人松井の家に入り、此所できく女に手紙を書いたのである。このころひぜんが未だよくなっていなかった

ことは事実で、この手紙をかいたあとの三月八日の記に

八　晴　木下川花一覧　馬橋ニ入

足ノ疥瘡大ニ腫　苦痛難忍

とある。無理をしたために、また悪化したのであろう。とにかく、このように飛び廻っていながら、抜け抜けとした手紙を書いて、留守する妻を心配させたり嬉しがらせたりしている一茶は、なかなかの悪性者である。

六月二十七日江戸発、七月四日柏原に帰着。この帰郷後三回目の江戸入りを最後として、一茶は郷里に定着した。その翌年長女さと女を恵まれ、翌々年、文政二年『おらが春』が執筆された。一茶五十七歳である。もっとも成稿は文政三年と思われる。このころの一茶は敢て富有とは言えぬまでも、小作米のあがる身分で、周辺長沼をはじめとして一茶閥が出来上っており、彼の生活は気任せな門人めぐりを主としたものであった。『おらが春』はさと女の可愛盛りとその死が中心のようになっているが、長い間用意されたものらしく、諸国ばなしや俚俗談までも、その年の出来事らしく構成されている。所載句二百三十余句は近作ばかりではなく、いわゆる一茶調の代表されたものである。『おらが春』の後に再び見るべきものは残されていない。

その翌年十月はじめ待望の二男石太郎をあげたが、間もなく一茶が中風を発し、石太郎は翌年正月十一日母親の背中で窒息死を遂げた。翌年三男金三郎が生れたが、今度は十年連れ添った妻きく女が病気になり、生後一年余りの金三郎をのこして没し、やがて金三郎も母のあとを追った。そこで六十二歳で雪女を迎えたわけであったが、二ケ月余りで離縁となった。現在一茶の血を伝えているのは、三度目の妻やを女のやどした遺腹のやた女によってである。文政十年六月一日柏原の大火によって家は全焼し、わずかに残った裏畑の穀物倉に仮住中、何度目かの中風発作によって急死した。六十五歳であった。